令和6年度 第2回子供読書活動推進会議 議事録

日 時：令和7年2月14日(金) 10時00分～12時00分

場 所：Teamsによるオンライン会議

出席委員：今井委員長、宮澤副委員長、三國委員、恩田委員、田沼委員、須田委員、
寺嶋委員

欠席委員：小川委員、中村委員、新保委員、田中委員、内田委員

1 協議

各協議事項について、委員から以下の通り意見があった。

(1) 全体目標及び施策ごとの指標について

【今井委員長】

全体目標の1か月に1冊も本を読まない児童生徒の割合（不読率）の減少について、目標値には及ばなかったが、わずかに令和5年度の数値を下回っている。その要因として、今年度から「本」の中に「電子書籍」を含めて調査を行ったことが影響したことが考えられるが、この点についていかがか。

【寺嶋委員】

電子書籍に関して、電子書籍だけの割合とその数値が分かれば教えていただきたい。

【事務局】

数値の基礎となる「埼玉県学力・学習調査」（以下「県学調」）では、電子書籍の割合について把握できていない。今後のアンケート結果から、電子書籍の割合が得られれば良いと考えている。

【今井委員長】

県学調の調査項目に、電子書籍に関する項目が追加されたことによる学校現場への影響はあるのか。

【田沼委員】

県学調の質問に入ったということは承知しているが、そのことについて本校の生徒に対して特別にアンケートを取っているわけではないため、現状がどうなのか、感覚がどうなのかということについて学校現場の状況を申し上げることはできない。

現在の子供を取り巻く環境から言えば、電子書籍を含むことは当然望ましいことであるため、今後実施予定のアンケートにおいて数値を捉える試みをするということについては素晴らしいことだと思っている。

【今井委員長】

今回から電子書籍を含めたという点が、調査の条件が変わった点として挙げられるが、電子書籍が要因だと確定することはできないということだろう。

電子書籍の利用は伸びているが、市場では雑誌や漫画での利用が多い状況だと思う。しかし、この県学調の調査では、電子書籍に雑誌や漫画は含まれていないため、不読率の低減が

見られたが大きくは下がらなかったのではないかと個人的には思っている。

全体目標の割合の変化について、原因を確定することは難しいと思うが、電子書籍の影響以外で原因は考えられるか。例えば、これまでの取組の効果が徐々に出てきていることも挙げられるかもしれない。

不読率については、中学生の方が厳しい状況であるが、令和5年度の全国学力・学習状況調査の中で「読書が好きですか？」といった質問に対して、埼玉県の中学生の7割弱程が肯定的に回答していたかと思う。中学生になっても読書は好きだけれども、小学生の時に比べると部活動等で忙しく、読む暇がないというのが現状ではないかと感じている。そのため、生徒が大半の時間を過ごす学校の中で、読書に関わる時間をうまく作ってあげることができると、徐々に効果が出てくるのではないかと個人的に思っている。

高校生になると、もっと忙しくなると思うが、資料2ページの「2. 施策ごとの指標 ③ 県内高校図書館における貸出利用率」については数値が上昇しているため、学校図書館を含めた学校の中での取組が、徐々に成果を出してきているのだと思う。

【須田委員】

貸出利用率の上昇については、図書館のPRが非常に進んできているためだと思う。前任校の久喜高校や、現任校の越谷東高校でも、司書からの発信がいろいろな形で生徒に届いており、それに合わせて生徒が図書館に足を運ぶ率が上がっている。

もう一つが授業で図書館を使う場面が増えてきたことが挙げられる。越谷東高校においても、昨年度はほとんどなかったが、今年度はいくつかの授業で図書館を活用している。本校の資料だけではなく、他の学校から借りた書籍も一度に揃えて、提供している場面もあった。これらが、本の貸出しにつながっていると思う。

もう一つは、個人で努力をしている例である。高校は講師を招いて講演会をやることが多くあるが、そのテーマに関連した本を図書館の入り口に広く並べて、生徒の関心を誘う取組を行っている。これらの努力が少しずつ上昇率に繋がってきていると思っている。

【今井委員長】

計画に位置付けられている取組以外にも、学校の実践や努力でこういった結果に繋がっているのかもしれない。

【須田委員】

先ほど、中学生で不読になってしまう原因には、部活等が始まって忙しいからという理由があるのではないかという話があったが、小学校では読書に取り組む機会の提供について非常に努力して取り組んでいるにもかかわらず、それでも不読になってしまう児童はいる。これらの児童像みたいなものは何か掴めているのか。

本日小学校の先生が不在であるため、回答が難しいかもしれないが、例えば小学校は今、エリアによっては外国籍の人も増えていて、その子たちが読むものが用意されていないかという疑問もある。学校でいろいろな設定をして、本に触れる機会は作っているにもかかわらず不読になってしまう子たちの児童像が見えてくるとまた違う対策もできるのではないかと思った。

【今井委員長】

実際、外国語に関係する本を学校に置いているのか。また、学校で不読層の児童たちを把握しているのかどうか。その点についていかがか。

【恩田委員】

学童保育の現場の者であるため、学校の中のことを全てわかるわけではないが、小学生やその家族を毎日見ているという立場から発言する。現在、放課後児童クラブを利用する低学

年層の割合も非常に増えており、それらの子供たちの家族も見てみると、日々学校から本を借りてきている場面はすごく目にしている、子供たちも「今日こんな本借りてきた」と見せてくれるので、学校では本を借りることへのサポートを非常によくやっていると感じられる。しかし、学校でも本を読む時間があるかもしれないが、「借りてきた本を家庭で見る」ということや、放課後や休日に子供たち自ら、または家族・保護者と一緒に見るといったようなことも含めて、サポートが必要だと思う。特に小学校の低学年あたりまでは家族やその周りの大人たちの手助けがないと難しいのではないかと思う。

また、外国籍の子供の様子も見ているが、やはり本を借りるまでは、学校の中で支援してくれているが、その先の家族・親子で見るといった点に関してはサポートが必要だと思う。また、様々な言語の本が図書館や学校の図書室にあるのかという点については分からないが、数は多くないのではないかと思う。

【今井委員長】

外国語の本については、久喜図書館で言えば子ども図書室があるが、棚の中にただ置いてあるだけのような状態である。今回、多様性という形で位置づけられているため、しっかりと久喜図書館でも整理をして、学校に周知していきたいと考えている。

【田沼委員】

中学校における状況を話したいと思う。先ほどの、外国籍の生徒に対してであるが、非常に多様な言語を扱う生徒がいるため、全ての国の言語の本を揃えるということは実態としてできない。しかし、例えばそういった生徒には週3回個別支援を行っているが、そういう時に図書室で支援を行いながら、その生徒たちに合う日本語で書かれた本を紹介するといった支援は時間をかけて手厚く行っている。例えば、テスト問題についてもルビ振りにしたりしている。

小学校についてであるが、先日県内の小学校に訪問し、一年生と四年生の教室に入って国語の授業を見る機会があった。どちらの教室においても物語文を扱った国語の授業だった。その中で、平行読書という子供たちが国語の教科書と関わって読み広げたい本を紹介する状況が見受けられた。また、教室に本を並べてある状況も見受けられた。

これは決してその学校だけのことでなく、これまで訪れた小学校において多くなされていることだと思う。学校内を歩いても、本の紹介や読書の標語を見かけたため、小学校においても読書の環境を整える取組が行われていると感じた。

中学校で見ると、取組として例えば朝読書が挙げられる。本校においては大変重視しているため、月曜から金曜まで毎日10分間朝読書を行っている。そのため、学校に来ている生徒には不読者はいないと考えている。

しかし、家で本を読んでいるか、学校の昼休みに読んでいるかとなると、話は別である。朝読書からどのように広げていったらよいのかという点については課題であると考えている。

【今井委員長】

学校の中での、教科での取組や学校図書館との連携をしながらの取組といったことに関して、非常に充実しているように思う。そういった現場の努力が、不読率の減少に繋がったと感じている。

次に、子供読書活動推進計画の策定状況である。市町村の計画の策定率については令和5年度と同じであるが、策定を検討している自治体が6町あり、今後この6町を中心に策定の支援を行っていくということで説明があった。

実際市町村で策定するにあたり、課題やハードルがあるのかという点が気になるところである。三郷市の読書活動推進計画を策定する時に、三國委員も図書館として関わりがあったかと思うが、策定するにあたっての課題等を把握しているか。

【三國委員】

計画の目指すところというのは、読書によって子供の生活や将来設計がより豊かになることだと思うが、調査の「指標設定の有無」の結果が大変興味深い。三郷市も、「どれぐらい読んでいるか」という数値を目標にした時に、学校同士の数値の比べ合いになってしまうのではないかと、先生方から数値化することの是非について議論があった。

三郷市では、読書とまちづくりが結びついており、人の交流や人が育つ、街が活性化するということを読書の目標の中に位置づけている関係もあり、指標設定をしていない。それぞれの市町村において、子供の読書計画や市（町村）全体の読書計画において、何を最終目的にしたいのか、そして数値目標を設定するのかしないのかという点が難しいと思う。

県の読書計画に沿った形で計画を作成すればよいということはどの自治体も分かっているが、どのように目標を設定・変更すればよいかということは毎回悩んでいるところである。

【今井委員長】

指標を数値化することによって、子供たちの競争を煽ってしまうのではないかという懸念が計画を作る時の課題・問題として挙げられた。

県立図書館の館長として昨年度赴任してから子供読書の計画の策定に携わったが、子供読書というものは、多くの人との関わりが大切になると考えている。域内にも様々な関係者、関係機関、団体などある中で、一方的に行ってもうまくいかない。関係者等のコンセンサスを得ることが大変なことだと思う。事務局は、そのような課題を聞き取りながら策定の支援をしていただきたい。

計画の策定と併せて、計画の目標や中身について、取組を行う現場までしっかりと伝わっているか、共有されているかということがとても大事だと思う。学童保育も地元自治体の計画などに当然位置づけられていると思うが、現場としてはその計画あるいは目標を意識しながら取り組んでいるのか。恩田委員に伺いたい。

【恩田委員】

現在は意識していない。何かの取組を行う際、例えば「いじめはいけないよね」ということを子供たちと一緒に学び合うときに、絵本をうまく取り入れながら行うことがある。また、例えば1年生が生活になれるまでの間、絵本を読みながら少しゆったりとした時間過ごすこともある。折に触れて、「この絵本はいいよ」ということを職員同士で意見交換することもある。子供たちも、静かに過ごしたい時に、本に親しみながら過ごすことをしているため、どんな本を学童の生活の中に持ってくるかということは、職員が意識している。

【今井委員長】

寺嶋委員にも伺いたい。第5次の計画の取組の視点の中で、多様な子供たちの読書機会の確保という多様性の視点が推進計画に位置づけられたが、特別支援学校の読書活動の変化、あるいは教員の意識という点で何かあるか。

【寺嶋委員】

本校では、「読書」「図書環境」をキーワードとしていろいろな場面でコラボするという取組を行っている。例えば、今年度は「コラボ給食」というものを行った。校長や教頭、教務主任が絵本を読んで、それをビデオで撮ったものを各教室で流し、それに関係する給食をその日に提供するという食育と図書教育のコラボを行った。これにより、子供たちに絵本に興味を持たせるという取組を行っている。また、昨年からは図書室も、少し大きな廊下のスペースに、ずらっと本を並べる形で整備した。生徒たちがそこで腰を下ろしたり、あるいは止まって本を見たりすることができるような環境を整えている。その結果、昨年度は図書館利用人数が364名であったが、今年度は12月現在で876名となった。場所を変えるだけで

も変わると思う。また、コラボ給食で生徒たちに興味を持たせて、担任が折に触れて紹介をするといった読書・図書をキーワードとして広げていく取組を行っている。

【今井委員長】

行田特別支援学校では非常に良い取組を行っており、今年度も久喜図書館の図書館講座の中で発表してもらったこともある。

計画があれば、何のために取り組むのかということが明らかになり職員のモチベーションにもつながり、目標等が現場でしっかり共有できれば取組にも力が入るだろう。計画の策定はもちろん、現場までの共有というところも同時に進めていく必要がある。

(2) 子供の視点に立った読書活動の推進について

【宮澤副委員長】

事前に自身の研究の中で、子供を主体とした取組について、具体的な事例等聴取できていることがあれば発言してほしい旨、事務局から依頼があった。それに関し、二点まとめたので説明する。

まず一点目について、子供を主体とした取組として、子供から子供に読み聞かせをする例を挙げたい。例えば、小学一年生が次に入学してくる幼稚園児に対して読み聞かせをする例がある。国語等の授業の中で小学生が練習をして幼稚園に行ってから本番をする、幼小連携の試みとして行われていることもある。また、小学生が小学生に、図書委員が読書週間で選んだおすすめの本を、それぞれのクラスでみんなの前で読み聞かせをするという光景もフィールドワークの現場で何度も見ている。また少し珍しいが、中学生が小学生に読み聞かせをするケースである。中学生の図書委員が出身の小学校の小学生に読み聞かせに行くというようなケースをフィールドワーク中に見たことがあり、中学生にインタビューもしたことがある。中学生は「自分たちも昔やってもらったのでこれが当たり前」「小学生に読者の楽しみを教えてあげたい」といったことを発言していた。

これらが、子供を主体とした取組の1つ目として挙げられると思う。「子供のやってみよう」ということが重要だと思う。特に、三番目の中学生が小学生に行く例は、図書委員の中から出た意見ということであり、まさに「子供のやってみよう」だと思う。

また、小学生が幼稚園児に行く点に着目すると、教員がいかに単元学習の中でやってみなさを醸成するかということが鍵になってくると思う。

二点目は、中学校の授業開きにビブリオバトルをして、その後選んだ本と名前をリストにして配布することで、読書コミュニティが形成されたという取組である。これは宮澤(2017)¹という論文になっており、自身の実践である。三年間、筑波大学の附属中学校で国語の非常勤講師をしていた経験があり、その時のまとめになる。宮澤(2017)では次のような考察が示されている。

ビブリオバトルが授業開き以外にも多様な意味を持つ活動であることについて二点言及したい。(中略) 第二にビブリオバトルが読書コミュニティの形成に役立つということが挙げられる。これまでいくつか展望を示してきたが、その中でも特にこのことが重要な展望だと示したい。ビブリオバトル単元の最後にクラスのメンバーが何を読んだのかわかる選書リストを生徒たちに配布した。その結果、「ビブリオバトルの本何読んだ?」「どんな書評した?」「いいね。それ今度読んでみよう」という会話がクラスの中で行われる様子を見て取ることができた。別々のクラスの生徒が廊下で同様の内容を話している様子も複数見て取ることができた。クラスの中はもちろんであるが、クラス

¹ 「ビブリオバトルから読書コミュニティをつくる—三年間の実践から見た展望と課題—」(宮澤優弥 人文科教育研究(44)209-221 2017年12月)

の中で閉じず、学年まで広がる読書コミュニティ、すなわち読書という話題に関して、関心や問題、熱意などを共有し、その分野の知識や技能を持続的に相互交流して生み出し、共有し、実践を深めていく学習者ネットワークを形成する第一歩を築くことができた。(宮澤 2017: 218-9)

このようなことも、教師きっかけではあるが、最終的には生徒主体、子供主体で読書のコミュニティが作られ、やり取りがされているところが、一つ事例として報告できると思う。

最後に、このような推進計画の中で「取組」と言うとき、プログラムや何か新しいことをすると捉えがちであるが、日常的な実践や子供が主体的に読書をする行為を見て取って、県の読書推進活動の中でも取り上げていくことが重要なのではないかと思う。先ほど田沼委員や寺島委員からご発言があったような日常の教育活動、学習活動の中に読書活動も組み込まれているため、そういったものが取組として挙げられると思う。

【今井委員長】

取組というと、非常に硬い感じがするが、日常的な実践のようなものが良い事例になるということでその通りだと思う。このまま続けてフィールドワークの手法についてもお話しいただきたい。

【宮澤副委員長】

フィールドワークについては、何をリサーチクエスチョンとして進めるのかによって取るべき手法も変わってくると思う。

例えば資料1にある、埼玉県学力学習状況調査で不読率が低かった学校を対象とした調査を行うのであれば、リサーチクエスチョンとして、不読率が低かった学校にはどのような特徴があるか、どのように子供を主体とした取組を計画しているのか、そのような学校において日常的に読書に親しんでいない子供には学校の取組がどのように映っているのか、というようなことがリサーチクエスチョンとして設定できると思う。上述の場合は、まずは学校長、副校長、司書教諭、学校司書等にインタビューをしていくことになるかと思う。

学校でどのような取組をしているのか、取組にはどんな困難があるのか、その上で読書が好きで日常的に親しんでいる子供以外の子供たちにも焦点を当てて、エスノグラフィック・インタビューを行うということも一つの方向性である。

そしてこのことに加えて、個人的には、ある学校だけに着目するべきではないと考えている。もっと広く見る必要があると思っている。例えばある学校やそれを取り巻く地域に焦点を当てて、読書を取り巻くヒトやモノのネットワークやコミュニティ、一例ではあるが、学校図書館や公共図書館、地域書店や地域住民等を描き出すという手法もある。上述の内容が重要だと個人的には考えている。今、読書というものが文化として存続するのが少し危ういような状況にもなっていると個人的には思っている。そのような中で、どのようにヒトとモノのネットワークが構築されているのかを、フィールドワークで見えていくということもよいのではないかと思う。

【今井委員長】

不読率を下げるためには、日常的に読書に親しんでいない子供たちへのアプローチ、あるいはそういった環境へのアプローチが重要という点について、その通りだと思う。

県立図書館の事例を話すと、1月29日にボランティア交流集会というものを開催した。県立図書館で活躍しているボランティアが一堂に会して、発表や意見交換を行うものである。今回は、取組発表や意見交換のほかに、全体を少人数のグループに分けて、ビール瓶のケースくらいの大きさの段ボール箱を用意して、「一箱本棚」というものを作ってもらった。それぞれのテーマを決めてもらい、図書館の書架から本を探してきてもらって、読んでもらいたいと興味を引くような飾り付けやコメントなどを入れて、最後に発表してもらおうと

いうものである。皆時間を忘れて真剣に取り組んでいたが、今回の資料の4ページの「子供を主体とした取組について」というところに、本の選定や紹介、感じたことへの発信、読書への興味関心を仲間が発信ということで3つあるが、まさにこれにぴったり合うのではないかと思った。今回は大人が対象であったが、こういった取組が学校や教育現場、図書館で行われているのであれば事例として取り上げてよいのではないかと感じた。

最後に、子供の意見を取り入れるためのアンケートについてである。アンケートの実施方法に関して、例えば図書館でも子供関連の事業をやっているため、協力してもらえるということであればそのような場を活用して同じアンケートを行ってもよいのではないかと考えている。

【田沼委員】

資料6ページの間3について大変興味があるところである。「家には自分や家の人を読む本がどれくらいありますか？」という質問である。この質問だけ、ほかの質問と比べて、これ以外の答えを認めてない。

例えば、問1であれば11冊以上というようにそれ以上の回答を認めている。全国学調を見ると、501冊以上といった選択肢があるため、この場合で言うと301冊以上といった選択肢にしたほうが良いのではないか。何か意図があるのであれば気になる場所である。

全国と比べてみると、本棚一列分や本棚三分といった表現があるのはすごくわかりやすいと思う。全国学調の質問と比べると、改善がされていると感じた。また、問6について、読書にどのようなイメージを持っていますかという質問であるが、中学生にとってマイナスイメージの回答として一番多いのは「面倒くさい」という回答ではないかと思った。

【事務局】

問3の「家庭での本」の関係の設問であるが、県学調にならって設問を設定している。確かに301冊以上が選べないという指摘はその通りであるため、選択肢について検討してまいる。

【今井委員長】

事務局に伺いたい。アンケートの内容というのは、全体目標の不読率を低減させるために子供たちから意見を集めて、今後新たな取組を考え、既存の取組に反映させていくということが質問の背景にあるのだと思う。アンケートの質問のねらいが7ページにあって、例えば家庭環境と読書習慣の相関関係を探るといものがあるが、相関関係があるとすれば、今後、家庭環境を改善するような取組も必要かもしれないというような深掘りしたねらいがあってこのような質問になっているのか。事務局がどこまで想定をして作ったのか聞きたい。

【事務局】

意図としては「ねらい」にある通り、本を読む子供と読まない子供の読書の動機や、家庭環境、自由な時間の過ごし方というものを、本を読む子供と読まない子供で探ろうということである。また、読書にポジティブなイメージを抱いている子供から読書活動のアイデアを探りたいというねらいもある。

アンケートの結果から、例えば「本を読む子供は家庭に多くの本があって、電子書籍も活用しているのではないか」「本を読まない子供は読書に抵抗感があって、まだ本の楽しさに気付いていないのではないか」「本よりもSNSやデジタルコンテンツなどに時間を費やしているのではないか」というような仮説を立てている。仮説を踏まえるなら、本を読まない子供たちへのアプローチとして、家庭での読書を楽しむような取組も必要であると思うし、SNSやデジタルコンテンツを活用した、本の紹介のような取組も有効ではないかと事務局でとらえている。

アンケートの結果でそのような方向性が導けるのか、全く別の結果となるのかわからない

部分もあるが、確認していきたいと考えている。

【今井委員長】

事務局の方では不読率を下げるためにいろいろな仮説を立てた上で、アンケートの結果を踏まえて、取組に生かして行こうということだと思う。

【恩田委員】

問5について、「自由な時間はどのように過ごすことが好きですか」という質問であるが、例えば友達と遊ぶことや何もしたくないという子供もいると思う。広い年齢層の子供たちに聞くのであれば、その点に関してどうなのかと思う。

【今井委員長】

田沼委員からの発言でもあったが、「本を読むのは面倒」といったほうが受け入れやすいのかもしれない。受け入れやすい、考えやすい表現にしたほうが素直な結果になるのかと思う。

【宮澤副委員長】

提案として、アンケートの問4「本を読みたいと思うのはどのような時ですか」に「人と話すきっかけ、話題にしたい時」を入れてはどうか。読書教育、読書教育系の研究、昨今の研究においても、人とつながるネットワークは重要なキーワードになっている。また、これらが児童や生徒、子供の動機につながることも重要だと思うので、入れてみてはいかがかという提案である。

【今井委員長】

事務局に伺いたいが、アンケートについてはここで意見をもらって事務局でまとめてすぐ実施という形になるのか。

【事務局】

本日いただいた御意見を反映させて8月のアンケートで使用したいと考えている。

【寺嶋委員】

問1・2について、「参考書等は除く」とあるが、参考書に新書なども含むのか。

【事務局】

いわゆる新書は本に含まれる。ここでいう参考書は、学習参考書を指す。

【今井委員長】

協議についてはここまでとする。